様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 20 日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21510287
研究課題名（和文）非婚女性の貧困と生活不安に抗する家族のオルタナティブに関する研究

研究課題名（英文）Alternatives to the Family:For Women's Life Security

研究代表者
牟田　和恵（MUTA KAZUE　）
大阪大学・大学院人間科学研究科・教授
研究者番号：80201804

研究成果の概要（和文）：未婚・離婚女性のみならず、婚姻的地位の如何にかかわらず女性の将来不安の中心をなす、依存や孤立（経済的・社会的）に抗していくことのできる人のつながりの基盤、あるいは家族のオルタナティブについて、核心となるべきものが、ケアの倫理とそれにもとづく社会構想であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Alternatives to the conventional family are necessitated for dignified lives of women, irrespective of her marital status. Conception of society based on the ethics of care should be the in the core of building alternatives.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー
キーワード：依存、ケア、家族のオルタナティブ、シングルマザー、ドゥーリア、フェミニズム、正義論、平等

１．研究開始当初の背景

（1）急速に未婚化が進行し、同時に離婚率も上昇しているにもかかわらず、わが国の社会保障政策等は、厚生労働省の「モデル世帯」にみるように、女性はいずれ結婚し夫に扶養される存在であることを前提としており、しかも性差別慣行の根強さから、少なくない女性たちが、将来的に社会経済上、不安定さと困難さを抱えた「アンダークラス」として出現することになる（樋口美雄ほか『女性たちの平成不況』日本経済新聞社、2004、橋本健二『階級・ジェンダー・再生産』東信堂、2003）。この事態は、当事者には言うまでもないが、日本社会の全体にとっても、看過しがたい危機であり、この事態への対処の方策が必要である。具体的には、婚姻地位のいかんにかかわらず、女性たちが尊厳をもって生きられる生の基盤・家族のオルタナティブを構想しな

ければならない。

(2) これまでのわが国のフェミニズム理論における家族論は、既存の家族構成あるいは現在進行しつつある家族構成の変化を考察・分析する社会学的アプローチと、政治体制の基本的ユニットとしての社会に要請される家族像に対してほとんど目を向けてこなかった政治学に対する批判的アプローチに二分化されている。そこから求められるのは、学問研究領域にも深く影響を与えてきた公私二元論を克服し、家族論と政治理論との接点を見いだし、そこから新しい「家族」論を政治思想論の基盤のもとに構想することである。

(3) 女性たちの、婚姻地位に囚われない、生の基盤の実践としては、かつて日本社会においては1970年代のウーマンリブ運動のなかで女性たちの共同体が実践的に模索され（西村光子『女たちの共同体』(社会思想社、2006年)、海外では、レズビアン女性たちを中心として女性のコミュニティ作りが行われているが（Weinstock and Rothblum, *Lesbian Friendships: For Ourselves and Others* (New York UP,1996), Weston,*Families We Choose*, Columbia UP 1991）、女性たちが家族に代わって持続的に支えあう場にとって必要な機能とは何かを、体系的に論じた研究は未だほとんど存在しない状況である。そこから求められるのは、これまで規範的家族のみに閉じられてきた家族機能を、親族・血縁にとらわれない形で、女性たち一人ひとりが置かれた社会的位置づけから生じるニーズに応えるコミュニティ形成のあり方を探ることである。

２．研究の目的

（１）実際に、法的な保護を受けた規範的家族とは異なるコミュニティ形成にとって、当事者たちが何をそのコミュニティに期待しているかについて調査するなかで、いわゆる〈家族〉機能とは何かを明らかにする。その形態に固執されてきた〈家族〉研究を離れ、〈家族〉に求められてきた機能研究を遂行するために、フェミニズム論内における、反家族制度論を中心とした理論研究を行うと同時に、実際に非規範的家族を選択した人々への調査研究を行うことで、どのようなコミュニティが各個人の生活実践の基盤となりえているかを明らかにし、女性の貧困・生活危機への対処のための一処方箋を描く。

(2) 理論上、規範的家族を乗り越える新たな〈家族〉の形が描くだけでなく、そうした理念が、実際の未婚女性たちの不安や葛藤を解消する手立てとするため、新たな〈家族〉の可能性を現実のものとしている例を収集調査し、その姿・方法論と可能性を広く社会に浸透させる必要がある。女性たちが家族に代わって持続的に支えあう場にとって必要な機能とは何かを、体系的に論じた研究は未だほとんど存在しない状況である。本研究では、これまで規範的家族のみに閉じられてきた家族機能を、親族・血縁にとらわれない形で、女性たち一人ひとりが置かれた社会的位置づけから生じるニーズに応えるコミュニティ形成のあり方を探ることで、近い将来の日本社会の危機的課題である、非婚女性の貧困化問題への対応の一つのアプローチを目指す。

３．研究の方法

（１）新しい親密圏と家族･ケアの倫理、ニーズ解釈を巡る政治に関する文献研究を行う。とくに、北米を中心にして法学・社会学・倫

理学の分野で数多く出版されている家族・ケアの倫理、新しい親密圏に関する文献と、政治理論の分野において社会正義論・平等論の新しいオルターナティヴとして登場し始めているニーズ解釈を巡る政治を論じる文献を収集し、その分析と考察を行う。

(2) コレクティブハウジング、シェア・ハウジング、シニアハウスおよび、ゲイ・レズビアンコミュニティにおける生活協同ネットワークの事例調査とシングルマザー協同ネットワークの調査とそのための情報収集を行う。

(3) 近年増加しているアジア諸国（中国・タイ等）で就労する未婚女性たちについて調査を行い、彼女たちが日本社会と因習的家族のなかでで生きることに困難を抱えている実態をあきらかにし、彼女たちをはじめとする、将来の生活を日本社会での婚姻的立場に依拠できない女性たちの、将来に向けた生きる基盤の構想について検討する。

４．研究成果

(1) すがもフラット・大泉学園シェアハウスなどのコレクティブハウジングの生活実践おおよび台湾・上海で就労する未婚女性の調査によって、因習的家族・結婚を前提としない、家族のオルタナティブの可能性を明らかにした。

(2)ケアの倫理と非婚女性の生活状況の日韓比較の目的で、韓国女性政策開発院および韓国NGOグローバル・アクティビスムフェミニストスクールにて調査・研究会を行ったほか、キテイの提唱するケアの倫理としての「ドゥーリア」の実践の一環として、韓国における産後調理院に関する調査を行った。

(3)家族のオルタナティブと生の基盤の核心となるべき理論枠組みを解明するために、エヴァ・キテイ『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』（Eva Kittay, *Love`s Labor* (Routledge 1999)の翻訳・監訳作業を中心とした研究会活動を行い、倫理学の分野での家族・ケアの倫理および新しい親密圏に関する議論と、政治理論の分野における社会正義論・平等論とを結びつけることと、依存関係から生じる依存労働の不可避性を基礎とした平等概念を構想することの重要性を明らかにした。この研究は、家族のオルタナティヴの理論的核心を探るという点で研究成果(1)と、ケアの倫理の具体化の実践という点で (2) とつながるものである。

(4) (3) 訳書の刊行 (9月、白澤社) および、原著者エバ・キテイ氏をニューヨークより招聘して行った連続講演・ワークショップ（2010年秋）によって、ケアの倫理に基づく平等概念の重要性と家族のオルタナティブの構想の可能性について、ひろく理解と浸透をはかった。同書翻訳刊行は、日本のフェミニズム理論・社会思想研究にとって大きな貢献となった。

(5) 非婚女性の生活不安をより広いケアの倫理と正義の理念のもとに考えて行くことをねらいとして、キテイ・岡野・牟田の共編著による『ケアの倫理からはじめる正義論---支えあう平等』を刊行した(8 月、白澤社)。同書は、倫理学の分野での家族・ケアの倫理および新しい親密圏に関する議論と、政治理論の分野における社会正義論・平等論とを結びつけた重要な理論書であるキテイ著『愛の労働』のエッセンスを、より広範な層に分かりやすく伝えることを意図して出版されたものであり、フェミニズム理論・社会思想研

究にとってのみならず、看護や介護の現場や青少年の性教育の場でも、有効であると評価を得た。

以上（1）－（5）の研究成果によって、非婚女性の将来不安の中心をなす、依存や孤立（経済的・社会的）に抗していくことのできる人のつながりの基盤、あるいは家族のオルタナティブについて、核心となるべきものが、ケアの倫理とそれにもとづく社会構想であることを明らかにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①岡野八代、リベラルの夢から醒めて――フェミニズムの政治と情念、年報政治学、査読有、2011、61-92

②牟田和恵、CEDAW 勧告と性暴力、学術の動向、査読無、15 巻 9 号、2010、36-41

③岡野八代、家族の時間・家族のことば、現代思想、査読無、37 巻 2 号、2009、188-199

〔学会発表〕（計６件）

①岡野八代、家族の可能性――自由論の中で、日本法哲学会、2011.11.12、一橋大学

②岡野八代、ケアの倫理と正義論、生命倫理学会、2011.10.15、早稲田大学

③ Muta Kazue, Appropriation of Motherhood: Sacrification and Glorification of Mother in War Memorialization in Japan 、11th INTERNATIONAL INTERDISCIPLINARY CONGRESS OF WOMEN、4th July、University of Ottawa

④ Okano Yayo, Revisiting Motherhood: Constructing Justice for Care 、11th INTERNATIONAL INTERDISCIPLINARY CONGRESS OF WOMEN、4th July、University of Ottawa

⑤岡野八代、家族―政治からの解放、日本哲学会、2011.1.29、東京大学

⑥岡野八代、新しい家族の可能性に向けて、ジェンダー法学会、2009.12.6、神奈川大学

〔図書〕（計８件）

①キテイ、岡野八代、牟田和恵（共編著）、白澤社、ケアの倫理からはじめる正義論、2011,174

②岡野八代・牟田和恵（監訳）、白澤社、会いの労働あるいは依存とケアの正義論、2010,448

③岡野八代（編）、岩波書店、自由への問い７家族、2010,222

④牟田和恵、ジェンダー家族と生・性・生殖の自由（『自由への問い』収載、岩波書店、2010、190-222

⑤岡野八代、政治の発見　1 生きる――間ではぐまれる生、風水社、2010、312

⑥牟田和恵（編著）新曜社、家族を超える社会学、2009、212

⑦牟田和恵、ジェンダー家族のポリティクス（『家族を超える社会学』収載）、2009、67-89

⑧岡野八代、家族からの出発――新しい社会の構想に向けて（『家族を超える社会学』収載）、2009、33-63

６．研究組織

(1)研究代表者

牟田　和恵　（MUTA　KAZUE　）

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：80201804

(2)研究分担者

岡野　八代　（OKANO　YAYO　）

同志社大学・大学院グローバルスタディーズ

研究科・教授
研究者番号：70319482